

書評

音楽と感情の心理学  
MUSIC AND EMOTION: THEORY AND RESEARCH  
(SERIES IN AFFECTIVE SCIENCE)

古川 聖

Kiyoshi Furukawa

東京藝術大学美術学部

Faculty of Fine Arts, Tokyo University of the Arts

1. 書籍情報

1.1. 日本語版

音楽と感情の心理学 (単行本)

P.N. ジュスリン (編集), J.A. スロボダ (編集), John A. Sloboda (原著), Patrik N. Juslin (原著), 大串 健吾 (翻訳), 星野 悅子 (翻訳), 山田 真司 (翻訳)  
ISBN978-4-414-30621-7 誠信書房 2008

1.2. 原著

Music and Emotion: Theory and Research (Series in Affective Science)

Patrik N. Juslin (編集), John A. Sloboda (編集)

2. 書評

かねてから待たれていた P.N. ジュスリンと J.A. スロボダの編集による気鋭の学者たちの論文を集めたアンソロジー「Music and Emotion: Theory and Research (Series in Affective Science)」の翻訳である「音楽と感情の心理学」が昨年末に出版された。原著の出版から遅れる事 7 年、残念ながら訳出されたのは全体、20 章の中のとくに音楽心理学に関係の深い章 12 章である。音楽に限らず感情を科学していくことには大きな困難がつきまとい、訳者があとがきで書いているように、「現在の段階では、(音楽の) 感情の持つ複雑さのために、この分野の研究はシステムティックに十分発展している状況とは言えない。」という認識が本書の基底にある。しかし本書中の多くの論文では現在の研究のもつ問題点の整理と未来へ向けた研究へのアプローチへの提言が行われている。

第 5 章「音楽的構造の感情表現に及ぼす影響」においてガブリエルソンらは音楽的な感情の研究において最

も一般的である言語報告による研究の持つ問題点を前提としながらも、それら手法を使った研究の現在までの流れを 1930 年代から現在まで、ヘブナーの感情表現円環図（音楽を表現する形容詞を 2 次元に円環状にならべたもの）を中心に研究手法、評価、音楽的要素、文脈などと関連させながら一覧表の形でまとめ、論文の最後では実はこれらの要素間の相互作用の研究がなされておらず、また時間の中での構造変化、つまり音楽的要素の継続的関係もこれからの研究されるべき課題であると結んでいる。言語報告による音楽研究を概観する上で非常に有益な論文となっている。

第 9 章「音楽の情動効果 – 算出のルール」においてシェーラーらは現在までの多くの研究において音楽作品自体が持ち表現する感情と、その音楽を聞いて聴取者の中にわきおこる感情が混同されてきたことを指摘し、それらを区別し関係づける四項（事象、人、徴候、観察者）のモデルを提出し情動の知覚と産出を区別した。それにそって自己報告の質問を変えることによって、結果が劇的に変化したと報告した（これは美人コンテストでの質問を「あなたは誰を選びますか」を「皆はだれを選ぶでしょうか」と代えるような方法）。とは言え、シェーラーにおいても第 2 章「脳に耳を傾けて – 音楽感情についての生物学的な展望」のペレツにおいても音楽における感情の特殊性において一般的な感情と音楽における感情を同一視する事への疑問が投げかけられている。脳科学と音楽の領域の専門家ペレツはエクマンの表情の研究を紹介し、それをモデルにすることの可能性を示唆している。それは脳機能の神経系の特化と表情の関係は比較的よく解明されているからである。発達や進化の視点、そして脳に損傷を受けた患者の研究から、ペレツは「音楽感情をすべての人に同様に生じる適応上の応答としてみなすならば、それらの感情を作り出すために特化した神経構造が存在し、その産物として音楽的感情が生じていると考えるのが最も妥当であろう」としている。その

上で音楽的感情の分離についていくつかモデルを紹介している。論文の最後には音楽の感情についての神経心理学は揺籃期にあるとし、脳画像技術の開発により近い将来大きな進歩があるだろうと結んでいる。

12章では音楽においてとくによく起こる、深い音楽体験、つまり感動についてその研究システムが紹介され、その反対に11章では日常的な感情との関係の中で音楽的感情が論じられる。ほかの章では演奏不安（7章）、音楽療法（4章）、映画（6章）、演奏（8章）、音楽感情の連続測定（10章）などが音楽感情との関係を取り上げられている。

原著の出版から8年になり、この分野の研究もさらに進展しているが、このような包括的な書物が日本語で紹介され心理学や認知科学の専門家だけでなく、私のような音楽家の目にもふれるということは、このような研究が必要とする学際性の意味からも重要な事だと思う。昨年に出版予告され現在まで出版が遅延している Rita Aiello (著) "Music: Cognition and Emotions" がその間隙を埋めるものとして出版が待たれる。

### 3. 著者プロフィール

#### 古川 聖

東京生まれ。入野義郎氏に師事、ベルリン、ハンブルクの音楽大学でイサン・ウン、ジエルジ・リゲティのもとで作曲を学ぶ。1991年に米国のスタンフォード大学で客員作曲家。ドイツのカールスルーエのZKMでアーティスト・イン・レジデンス。作品は、新しいメディアと音楽の接点において成立するものが多く、1997年のZKMの新館のオープニングでは委嘱をうけて、マルチメディアオペラ『まだ生まれぬ神々へ』を制作・作曲。2000年より東京芸術大学・先端芸術表現科准教授。ドイツと東京に在住。社会の中で表現行為が起こる場、新しいアートの形を探して2002年より、新しいメディアを使ったワークショップを世界各国で行っている。現在は理化学研究所、脳科学総合研究センターの客員主幹研究員として脳計測を通じた音楽認知の研究も行っている。